OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接触文化と非接触文化 : プロクセミックスによる文化の二分法の実証的研究
Author(s)	伊藤, 義之
Citation	年報人間科学. 1983, 4, p. 67-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11207
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八三年二月〕
『年報人間科学』第四号　六七頁―八七頁

接触文化と非接触文化

――プロクセミックスによる文化の二分法の実証的研究――

伊藤義之

接触文化と非接触文化

——プロクセミックスによる文化の二分法の実証的研究——

目　次

仮説
研究の方法
結果
分析
　一、自然要因
　二、社会的要因
　三、個人的要因
結論
引用文献及び参考文献
別表
　表—一　被調査社会
　表—二　各変数の名称
　表—三　各変数の項目の名称
　表—四　クロスタビュレーション及びカイ二乗検定
　付録　V01からV27までの全データ

今日動物行動学の分野において広く認められている動物の社会行動の重要な特徴の一つにテリトリアリティ（なわばり行動）がある。テリトリアリティとは動物が摂食や再生産の際に見せる他個体との間の空間的関係を示す行動であるが、とりわけ鳥、爬虫類、哺乳類などの脊椎動物のテリトリアリティはよく知られ、研究が進んでいる。しかしまたプラナリアなど下等動物も粗雑ながらテリトリー行動を示すという報告がある。

脊椎動物のテリトリアリティの研究者の一人ヘーディガーは同種の個体間の相互行為を調べ、脊椎動物を二つのグループに分ける分類法を発表した（一九五五年66頁）。第一のグループは「接触」動物と呼ばれ、猪やふくろう、海亀、そして多くの霊長類がこれに属する。これらの動物はできるだけ同種の他の個体との接触ができるようにものごとをアレンジする。これとは逆に「非接触」動物と呼ばれるグループはできるだけ他の同種の個体（時には異種の個体も）と接触を避けようとする動物の集まりである。このグループには猫、フラミンゴ、鳩、鶫や多くの反芻動物が含まれる。こうした行動がなぜ起るのかについて明確な理由はまだ見つかっていないが、人類学者エドワード・ホールはその動物の社会組織のあり方や環境の利用の仕方とこの種の行動との間に相関関係があるのではないかと示唆している（一九六六年13頁）。彼はまた非接触動物の方が人口密集のために生み出されるストレスに弱いのではないか、と推測している。

対面的状況下での人間の空間的行動を扱うプロクセミックスの研究者達はこういった動物の研究からのアナロジーで、人間の諸民族もまた二つのグループ――すなわち「接触」文化と「非接触」文化――に分けられるのではないかという議論を展開し、実際統計的に見て二グループ間の行動に有意な差のあることを示している（ワトソンとグレーヴス、一九六六年）。

「接触文化のメンバーは非接触文化のメンバーに比べ、より直接的に相対峙し、より近い距離で交渉し、より頻繁に相手を触り、より直接的に相手の目を見つめ、より高い声でしゃべる（ワトソン、一九七四年340頁）。」

実際のところプロクセミック行動全体のパターンは各文化によってすべて異なり、こういった二分法は単純に過ぎるところがある。例えばAという文化のメンバーはB文化のメンバーよりもより頻繁に触り合うが、目を見つめ合うのはAよりBの方が多い、ということも十分あり得る。そこでここではプロクセミック行動を要素間で矛盾することの少ない「タッチ（身体的接触）」、「からだの向き」、「運動要因」という三要素（ワトソン、一九七〇年、ホール、一九六六年を参照）に絞って考える。そうするとこの接触文化、非接触文化の二分法がはっきりしてくる。X文化のメンバーがY文化のメンバーよりも多くタッチしているなら、おそらく彼らはより直接的に相対峙するだろうし、より近い位置に相手との距離をとるだろう。従って本文中私がプロクセミック行動と言う時、それはプロクセミックスのすべての要素でなくこれらの要素のみを指しているのである。

なぜこの様な二つのグループに分れるのかという疑問に関して、プロクセミック行動と自然環境や社会組織など他の要素との関連性を取り扱った議論もそこここに散見できるが、その殆んどは主に逸話的なできごとや個人の印象といったもので、かなり納得の行くものもあるが実証性に欠けるものが殆んどである。そこで本調査はその実証を目標とし、次の様な手順で展開されている。

(1) 接触文化と非接触文化の両方の物理的環境や社会組織、個人的特性に関するデータを集める。

(2) これらのデータを二グループ間で比較する。

(3) どの要素がどの程度プロクセミック行動と相関しているかを調べる。

(4) 相関のパターンを分析する。

仮説

筆者自身の観察に加えてテリトリアリティやプロクセミックスを扱う多くの研究（バードウィッスル、一九七〇年、ヒューズ、一九五七年、ワトソン一九六八年、一九七〇年、一九七四年、ソマー、一九六九年、一九七四年、ホール、一九五五年、一九五九年、一九六八年、一九七四年、一九七六年、ハンデルマン、一九七五年、ゴフマン一九六七年、ローマックス、一九七五年）を基礎にして次の様な仮説ができあがった。

「ある文化におけるプロクセミック行動のパターンとその文化の自然（地理的）、社会的、個人的要素との間には色々な程度の相関関係がある。」

研究の方法

今回の調査対象となる社会を選び出すにあたって、先ず接触文化と非接触文化のサンプル数の極端なアンバランスが避けられた。接触文化としてよく知られている社会はアラブ（中近東）、ラテン・アメリカ、南ヨーロッパ及び南アジアの諸社会、逆に北ヨーロッパ人、東及び東南アジア人、北アメリカ人は非接触文化に属する（ホール、一九六六年、ワトソン、一九七〇年）。サハラ以南のアフリカ人、オセアニア人、北米インディアンについてはデータ不足のため今回の調査対象から除外した。加えて中部ヨーロッパや南アジア東部などの「境界」地域もはずした。そこで残った地域の中のHRAF（Human Relations Area File）にあるすべての社会からランダムに六十文化を最初に選び出した。この六十の社会のうち三十六が接触、二十四が非接触文化であった。次にこの二つのグループから再びランダムに半数ずつ（合計三十）が選ばれた。最後に隣接地域や重複地域を避けるために、そして二グループ間のアンバランスを是正するために、意図的にいくつかの社会が捨てられた。しかし実際は、多くの隣接地域が最初の段階でランダムに選ばれていたためにすべてのそういった地域が除外された訳ではない（例　中国北部と中国中部）。この様にして選び出された社会が表一[1]に示された二十五のケースである。これら二十五社会のうち次に番号で示したものが非接触グループに属するものである。(01)、(02)、(07)、(13)、(15)、(16)、(17)、(19)、(23)、(24)、(25)。これらを除いた後の十四文化が接触グループを構成している。

殆んどのデータはパーデュー大学（米国インディアナ州ウェスト・ラフィエット）に収められているHRAFによったが他にいくつか補足用に使用した資料もある。欠落データ（missing value）は殆んどの変数において二、三個に抑えることができた。これらは計算からはずしてある。

本調査に用いられた変数は二十七個で、その名称は表一[2]に示す通りである。

V01から順に各名称の表わす意味を次に説明しておきたい。

V01　対象となった社会の名前
V02　接触、非接触社会の区別
V03　地形
V04　湿度
V05　気温
V06　人口密度
V07　人口増加率
V08　民族構成
V09　言語構成
V10　戦争に対する態度

V11　移民の割合
V12　暴動、内乱の頻度
V13　家族構成
V14　一世帯あたりの構成人員数
V15　住宅事情
V16　街路様式
V17　政治の中央集権度
V18　出自体系
V19　基本的生計活動
V20　時間の扱い方、考え方
V21　生活の中で意識される時間の単位
V22　日常生活でよく見られる坐り方
V23　リーダーシップの強弱
V24　協調性
V25　個人の心理的性向
V26　結婚後の居住形態
V27　女性の婚前交渉に対する許容度

これらの変数のうちV03からV05までは自然（地理的）要因、V06からV19までとV26、V27は社会的要因、V20からV25までは個人的要因だとすることができるだろう。ただ各カテゴリー間の境界は必ずしも明快なものではないが。

表―三別表(iii)は各変数内の項目（values）の名称である。各項目の分類基準を次に記してみよう。但し明白なものは除く。

V03　七十パーセント以上の土地が山地か平地か
V05　温帯かそれ以外か
V06　一平方マイル（約二・六平方キロ）につき百人
V07　年十パーセント
V08　少数民族が全体の十パーセント
V09　単一言語使用か否か
V10　好戦的か穏健か
V11　移民の割合が二十パーセント
V12　年に一回
V13　拡大家族（三世帯同居）か否か
V15　住宅問題が顕在しているか
V16　格子状街路が主か放射状街路が主か
V17　中央集権体制か否か
V21　時間の単位か日の単位か
V27　婚前交渉が構造的に組み込まれているかどうか

二十七変数のうちV10、V20、V23、V24、V25はイデオロジカルなもので明確な分類基準はない。従って分類に際してはフィールド・ワーカーの記述に頼った。

この様な基準によって集められたデータ（付録別表(vii)参照）に基き、次にV02と他の各変数（V01とV14は除く）との相関関係がカイ二乗検定によって調べられた。V14については二グループ間の差の有無を見るためT―テストを行なった。

結　果

表―四(1)～(12)に示されたのがV02と各変数との間のクロスタビュレーションの結果である。左側は各マトリックスに属する社会の数、右側は上からカイ二乗値、(自由度)、有意水準である。V14のT―テストの結果は二グループ間に世帯構成員数の有意差がないことを示していた。これに対しクロスタビューレーションは、プロクセミック行動（V02）と多くの変数との間に有意な相関関係があることを明らかにしている。

分　析

一、自然要因

得られた結果から見ると自然要因はある程度プロクセミック行動に影響を与えているようだ。しかし気温とこの行動との間に相関は殆んど見られない（有意水準〇・一九〇四）。この一つの原因はほとんどの社会が一方のカテゴリーに入ったことにあるのかも知れないが、実際接触グループも非接触グループも同じ様に温帯以外に属しているものが多い。従って気温のこの行動への影響はほぼ無いと言って差し支えない。

気温とは反対に湿度とプロクセミック行動の間には強い相関がある（有意水準〇・〇〇二三）。特に乾季が存在することと接触グループにははっきりとしたつながりが見られる。もっとも彼らがこういった気候を好んで移り住んできたのかそれともこの種の気候が彼らの「接触」行動を育くんできたのかは分らない。他の相関関係についても同様だが、因果関係の矢印の方向はこれだけのことからは判断し得ないのである。とにかく、少なくともここで言えることはプロクセミック行動は気温よりも湿度の方と結びついているということである。タッチに限って言えば、肌（特に手）が乾いていることが人にこの種の行動を容易にする、或いは駆り立てるのではないかと想像される。ただ他の色々な要因がこの行動と関連していることから、ものごとはそんなに単純ではないかも知れないが。

地形との相関は湿度の場合ほど明白ではない（有意水準〇・一〇〇七）。しかしそこには接触グループは山地に、非接触グループは平地に住むという傾向がわずかながら窺える。これも想像だが、山地は居住可能地域が自ずと限られており対面的相互行為が起りやすく、反対に平地では相互行為の質、量が下り非接触的になりやすいのではないだろうか。しかしサンプル社会の中には例外がいくつかありその上地形に関してマージナルな（山地中心でも平地中心でもない）社会が多くあるため結果はそうすっきりとしている訳ではない。

三種の環境要因をひっくるめて捉えた場合、それぞれの要因を独立してプロクセミック行動に影響を与えているものと考えるのは早計だろう。というのはこの三要因の考えられる可能な組合せが十二通り（三×二×二）あり、それぞれが特殊な関係をプロクセミック

行動との間に持っているからである。但し現在はサンプル数が限られているためこれ以上細かく意味のある分析をするのは無理である。こういった複雑さに加えて人間は色々な所に移り住むことができ、実際そうしてきたという事実のゆえにあまりに単純な自然環境要因と行動との因果関係が作り上げられる可能性は現状ではまずあるまい。

二、社会的要因

自然要因と同様いくつかの社会的要因もまたプロクセミック行動のパターンとの間に相関関係を示している。最初に人口要因がこの行動とどう関わっているかを見てみよう。人口密度とプロクセミック行動の間に相関関係がないことは結果（表―四の(4)(別表iv)）を見ればひと目で分るが、これは非常に興味深いことである。普通、人口密度が高いほど「接触」行動は増加していくのが当然、と思いがちだが実際のところ相関はないのである。これは人間の量と相互行為の量が必ずしも比例しないことを示唆する。これは、例えば香港と東京という世界でも有数の人口密集都市が非接触文化に属するという事実を見れば納得がいくだろう。筆者自身もフランスのパリやカナダ・トロントのイタリア人社会と東京を比較してみて東京の方が混み合っているにも拘らず人々の相互行為は他の社会に比べてずっと少ないという印象を持った。問題は単に一人当りの空間がどのくらいあるかということよりも相互行為の質と量なのである。つまり、プライバシーを保ち不必要な（と感じられる）他人との交渉を避けることができれば人は混み合った中でも非接触者としていられるのである。

人口増加率もまたプロクセミック行動との間に殆んど相関関係を持たない（有意水準〇・一九六一）。が、一つの明らかなことは殆んどの接触社会が高増加率グループに分類される（十四社会中十一）ということである。人口増加率とは単なる統計的事実に過ぎず、その背後には家族の構成人員、結婚年齢、配偶者数、婚前また婚外交渉、中絶・避妊に対する考え方や対処の仕方といった多くの現象が潜んでいる。これらはプロクセミック行動に影響を与え、また与えられている訳であり、我々はこれら現象のレベルにまで進んでいって初めて「接触」グループと「高」増加率の関係を明らかにすることができる。これらは表―四の(11)(別表(v))、(12)(別表(v))、(23)(別表(iv))、(24)(別表(vi))のマトリックスに示されている。

表―四の(6)(別表(iv))、(7)(別表(iv))によれば、民族や使用言語が単一か多様かといったこととプロクセミック行動との間に相関は無い（有意水準はそれぞれ〇・七七五〇、〇・八七六九）。事実、接触、非接触文化の両方が同質社会にも多様社会にも同じ様に見られる。

プロクセミック行動と社会の戦争に対する態度との間にも有意な相関は見られない（表―四の(8)(別表(iv))。暴動・内紛の場合も同様である（表―四の(10)(別表(iv))。こういった全体的な社会としての戦い、動乱の扱い方と個々人の行動パターンとの間のつながりはない。つまり、社会が好戦的であるとか暴力的であるとかといったことを諸個人の行動に帰することはできない、ということがここから

分るのである。

移動性もプロクセミック・パターンとの間に相関関係はない。移動性の高い民族ほど相互行為が少なくなり非接触的になるのではないか、という期待通りの結果は出ず、移動性が高いほど非接触的になるのでもなければ逆に接触的になるのでもない。全く移動性とプロクセミック行動は無関係であった（有意水準一・〇〇〇〇）。この結果から一つ言えることは、社会の中の移民の割合が高くてもその社会のプロクセミック行動のパターンは基本的には変わらないということである。ということは個人の行動パターンは自然や社会の環境に左右されやすいものであって、生まれつき或いは社会化の過程で身につけた行動パターンが環境が変わると一緒に変わっていく、ということを示しているのだろうか。この疑問は移民の仕方、内容をより詳細に調べなければ解決しない。接触者が非接触文化に移住して（または非接触者が接触文化に移住して）彼らの行動がどう変化するか、をつぶさに観察していかなければ解けない問題であろう。

以上に挙げた社会的諸要因と異なり、家族構成（V13）は接触／非接触の二分法に大いに関係がある。核家族（夫婦とその未婚の子供より成る家族）やジョイント家族（キョウダイとそれぞれの配偶者及び子供が構成する家族）など二世代同居が一般的な社会は接触グループに多く、遂に非接触グループの殆んどは三世代以上同居の拡大家族（核家族がタテにつながった家族）を構成している。例外も少なく有意水準は〇・〇〇七五という高いものである。この傾向は極めて強いがその理由はとなるとはっきりとした指摘は難しい。推察するにこれは子供の養育の仕方と関連しているのではないだろうか。つまり、起居を共にする祖父母がいる家庭の子供とそうでない子供に行動パターンの差が出てくるのではないのだろうか。具体的に言うと祖父母のいる環境の子供は非接触者として、そうでない子供は接触者として育てられるのではないか。この仮説は一つの文化の中でも検証できることだが筆者自身この種の検証はしておらず、また他人の研究にも疎いためこれは仮説の段階に留まっている。

V02とV14（一世帯の構成人員数）の関係についてもT－テストの結果から見る限り相関は見られない。これは人口密度のところで述べたと同じ理由で説明できる。接触文化の方が狭い空間を有するとは必ずしも限らないのは、一人当り何平方メートルといった絶対的な尺度で測った空間が決定要因とならないからである。それよりも重要なのは住宅の供給問題（V15）はである。殆んどの接触社会が住宅問題を常に抱えているのに対し、非接触文化の住宅不足は殆んど現われてこない。これは住宅問題が財政的問題だけではないことを表わしていると考えられる。もちろんこれらの社会で人口増加率が高いといったこともあるが、その他に行動要因などの要因もこの問題に関係しているのではないか。プロクセミックスで説明すると、接触文化の住宅問題の多さの理由は次の様になる。非接触文化に属する人々は相互行為に深く関わり合うことを避けたり相互行為の状況から身を引くことに比較的長けており、ある程度家が混み合

っていても住宅が不十分だと感じることが相対的に少ない。それに反して、接触文化の人々は家の混み具合と別に家が狭い、住宅が不十分だと考えがちになる。このプロクセミック行動の違いがこういった調査結果を導き出したのである。

次に街路の敷かれ方（都市計画）について。アメリカの街路を例にとると、アメリカ人は通り（ストリート）というものは普通直交しており、街の中の距離はブロックの数で数えられるのが当然だと思っている。しかしこの「当然」は他の文化には通用しない。例えばフランスの都市の設計を見ると、通りは中心に定められたモニュメントや広場から放射状に伸びているのが分る。これはホールによって観察、紹介されている（一九六九年）。彼は主にヨーロッパとアメリカの通りについて言及しているが、これを本調査のすべての社会に当てはめてみると街路のパターンがプロクセミック行動と相関関係を持っていると分る（表―四の(13)別表(v)）。非接触文化の大半（六十七パーセント）がいわゆるローマ格子型の街路を持っており、それに対して放射状街路が主流のグループはすべて接触文化に属している。全体的に見てもプロクセミック行動と街路パターンの間にはかなりの相関関係（有意水準〇・〇一八九）がある。格子状街路と放射状街路はそれぞれ離社会的（sociofugal）な要素と集社会的（sociopetal）な要素であって、集社会的要素は人々をひきつけ合い、離社会的要素は人々を互いに引き離す作用を持っているからである。この様に少し注意して見ると接触社会には集社会的要素が、非接触社会には離社会的要素が多く観察されるものである。

構造主義的に見れば、街路構成の背後にある民族特有の考え方（ethnic view）は他の側面にも表われるかも知れない。政治的中央集権制をその一つの例に取ることができよう。アメリカの首都ワシントンに見られる放射状街路（もっともここは格子状街路と組み合されているが）は権力の中心という考えと相通ずるところがありそうだが、これは表―四の(14)別表(v)、すなわちプロクセミック行動と中央集権制との相関関係に実証されている（有意水準〇・〇二四一）。従って理由はともかくとして、街路パターンと政治的中央集権制は個人の行動パターンと相関をなしている、と言える。

接触行動と出自体系の関係をチェックして分ることは、非接触社会は父系または母系の単系出自（unilineal）システムを採用していることが多いということである。ここで用いられたサンプルはそれほど多くないが、選ばれた十の社会がすべて単系出自グループに入っている（表―四の(15)別表(v)）。接触社会は単系双系（bilateral）の両方にまたがっており、有意水準は〇・〇七〇一と十分高いとは言えないのでここではプロクセミック行動と出自体系一般の相関よりもむしろ非接触文化と単系出自の関係を強調したい。単系出自体系を採るということは出自集団（descent group）間の境界線が明確で曖昧さがないということである。双系出自の社会では逆に境界がはっきりと固定しない。こういった社会では相互行為の量と種類が狭い範囲に限定されない。このため非接触社会が双系出自集団となる可能性が低くなるのだろうと考えられる。

表―四の(16)別表(v)はプロクセミック行動と主な生計活動との相関

である。ここには若干の相関（有意水準〇・一一八一）があるように見えるがこれは偶然の産物か、さもなければ他のファクターが働いたことによるものだろう。というのも行動パターンの安定性に比べて生計活動はかなり流動的なものだからである。こういった流動的なファクターは調査から除外すべきだったかも知れない。

結婚後の居住形態（V26）と行動パターンとの間にも相関はない。これから言えるのは、プロクセミック行動にとって重要なのは誰と一緒に住むかでなく何世代と同居するか（V13）の様である。またV02とV27（婚前交渉に関する変数）のクロスタビュレーションの結果から見て、他人との接触の少ない社会では女性の婚前交渉は禁止されているかまたは存在しにくいらしいと言うことができる。九十パーセント以上の非接触社会が女性の婚前交渉に対して否定的な態度をとっているのに対し、六十パーセント近くの接触社会では女性の婚前交渉を許可し、またそういう構造を組み込んでいる。有意水準は〇・〇四一五であった。

三、個人的要因

先ず時間と空間の関係を探ってみよう。多くのアメリカ人はラテン・アメリカやアラブの人の「ルーズさ」に驚き呆れ、そして腹を立てている、とかってホールは指摘した（一九六九年、一九六五年）。アメリカ人にとって（そして日本人にとっても）彼らは決して時間を守らないしそれを気にもしていない様に見える。実際彼らは気にしていないのだ。日本（非接触文化）を訪れたあるエジプト人（接触文化）ジャーナリストが最初に驚いたのは彼が乗り合せた飛行機の機長が出発の十分遅延を謝ったことであった。会社に遅刻した人が遅れた理由にしろ言い訳にしろ何か言わなければならないということを知ったのも彼にとっては驚きだった（朝日新聞一九八二年二月一日付朝刊）。ホールのもう一つの指摘は我々（アメリカ人にしろ日本人にしろ）は仕事を順に一つ一つ片仕けていくのが常だが、ラテン・アメリカ人はいくつかの仕事を同時に行なう、ということである。彼らのやり方はポリクロニック（polychronic）、我々のはモノクロニック（monochronic）と呼ばれ、この二つの時間の扱い方は根本的に異なっている。ホールが記した次の様な驚くべき（我々にとって）逸話はアラブ人と我々のスケジュール（時間の単位）に対する意識の仕方、考え方がいかに違っているかを教えてくれる（一九五九年、第一章）。

あるアフガニスタンの男が自分の兄弟を何年もかかって捜し続けている。毎年カブールの街には兄弟を捜す彼の姿が見られたが仲々見つかった様子がない。それもそのはずで、彼らは落ち合う場所だけを決めて時間を決めていなかったのである。

この話が示す様に彼らの時間感覚は我々のとは異なり、我々には大雑把に見える。我々が誰かと会う約束をすると「十二時十五分に。」とか「九時二十分に会おう。」という風に大体五～十分の単位で時間を決める。列車の時刻表やテレビ番組など時によってはそれよりも細かく時を刻むこともある。しかし彼らはそれほど細かい分け方をしない。そうやって決めたところで守られるはずがないし、

守られるとも守ろうとも思っていないからである。この様にどの時間単位に焦点が当てられるかは文化によって明らかに異なっている。時間の取り扱い方について接触文化と非接触文化の相違を調べるためここでは二変数（V20とV21）が用いられたが、これらの変数とV02の間の相関はほぼ完璧なものであった。有意水準は表―四の(17)別表(v)、(18)別表(v)に見られる通りそれぞれ〇・〇〇〇〇と〇・〇〇〇二である。この結果は統計的にホールの考え方を強く支持するものである。現在のところそれが何に由来しているのかという説明は見出だし得ないのだが、空間と時間の扱い方がこの様に強く関連しているという事実は非常に興味深いものである。

次にV22を通して姿勢とプロクセミック行動の関係を考察する。姿勢を代表して坐り方についての変数を選んだのは、坐るという行為の中でもしゃがむということと椅子など何かの上に（或いは地面に直接）座るということの間には大きな違いがあるらしいからである。日本文化に代表されるいくつかの文化のメンバーにとってしゃがむことはごく一般的日常動作であり、疲れにくく快適な姿勢である。例えば書店で低い棚の本を捜す時、戸外で幼児の相手をし話を聞いてやる時、畑の草むしりをする時、我々は自然にしゃがむ姿勢を取る。しかし他の文化のメンバーは必ず何かの上に坐ったり、しゃがんでも野球の捕手の様につま先立ちしたり、さもなければ跪くのである。彼らにとってしゃがみ込むのは苦痛であったり長時間その姿勢を保つのは殆んで不可能でさえあったりする。集められたデータによると、しゃがむ姿勢は広く非接触文化に見出だされる（十中八社会）。この八社会はすべてアジアに属するものだがこの坐り方がアジア特有のものだと即座に決めつけることはできない。接触グループの非アジア地域のいくつかにこの姿勢をもつ文化が見られるからである。統計的に見て坐り方とプロクセミック行動の間に強い相関があるとは言えない（有意水準〇・一一四九）が、これは文化伝播の影響があるからではないか。今日椅子の使用は非常に一般的な世界的傾向でありその他の坐り方を目にする機会は余りない。先にあげた書店や畑のシテュエーションの様に、椅子もベンチもソファもない時人々はどうやって坐るのだろうか。石などの上に坐るのか地べたに坐るのかそれともしゃがむのか。これが坐る姿勢についての検討すべき問題ではないだろうか。

V23、V24、V25の三変数については前述の如く数量的処理の難しいイデオロジカルなものであるためどの社会がどこに分類されるかはフィールド・ワーカーの記述を信頼するほかはない。それでもデータの中には曖昧なものがあり各変数の欠落項目（missing vales）は四つずつと、その他の変数に比べてやや目立っている。

先ずリーダーシップとプロクセミック行動の関係を見ると、そこには相関が少なからずある様な印象を受ける。リーダシップ志向の社会の多く（八十二パーセント）は接触グループに属し、逆に殆んどの非接触社会（七十八パーセント）はリーダーシップが欠けている、と分類された。リーダーシップとプロクセミック行動の相関の有意水準は〇・〇五〇六である。タッチに関する限りこれはクララ・メイヨの次の仮説を証明している。彼女の仮説とは、目上の人や

年上の人、すなわちリーダーシップを取りがちの人は目下の人よりもよくタッチのイニシァティブを取り、目下の人は目上の人よりもよくタッチされる側にまわる傾向がある、というものである（一九八一年、第二章）。

協調性もまたプロクセミック行動との間に相関関係を持つ（有意水準〇・〇一八五）という結果が出ている。しかしここで注意すべき点は、これはフィールド・ワーカーの印象に基くものだということである。協調性があるかないかその多少を判断する際フィールド・ワーカーが用いる基準はおそらく被調査者の行動、とりわけプロクセミック行動であることが少なからずあろう。人々がより近接して立ち、より直接的に面と向い、より頻繁にタッチし合うほど、観察者の目には彼らの協調性は高いと映ることだろう。それゆえこれはトートロジーの域を脱し得ないかも知れない。もちろん、別の基準を用いて測ってみて実際彼らの協調性が高い場合もあろう。しかしその判断はこれを一つの変数として扱うには難し過ぎる様である。心理的性向（V25）もまたフィールド・ワーカーに行動とそれ自身を混同させる可能性を持った変数である。しかしそこに有意な相関は見られず（有意水準〇・二七九五）、それを懸念する必要はない。

結　論

今回の調査で扱われた二十五の変数が便宜的に自然要因、社会的要因、個人的要因と三つに分類されたが、その三グループのどれからもプロクセミック行動と相関関係のある変数がいくつか見出だされた。つまり、ある特定のタイプの要因のみがプロクセミック行動に影響している（或いはされている）のではなく、むしろ多くの要因が絡み合ってこの行動と影響を及ぼし合っているのである。従って次の段階ではこれら変数間の相互の連関と独立性を検討しプロクセミック行動との関係を捉えていく、という方向に研究が進むことになるだろう。事実今回の調査ではこの変数の独立性ということが一つのネックであった。この問題に加えて「坐る姿勢」のところで見た様に、文化伝播をコントロールする問題も解決していかなければならない課題として残された。こういった問題が出てきたのは一つには調査の分野が未開拓で結果の予測が困難であったためだが、プロクセミックスを意識していないフィールド・ワーカーによって記述されたデータを用いたことにもその原因があるだろうし、研究方法の不十分さもまた認めねばなるまい。データを集めるにあたっては直接的な観察を中心に行なったフィールド・ワーカーの民族誌に主に頼った訳だが、特に個人的要因などについては実験や調査質問紙法など純粋なフィールド・ワーク以外の方法も有効なものとなり得ただろう。もっともそこには多大な時間と労力の消費が伴い、一個人の調査に限界があるのも事実ではあるが。

いずれにしろ全体的に結果は予想以上にクリアーなものだった。ここで検討された相関の約半数が最低十パーセントのレベルで有意であり、その殆んどは五パーセント・レベルでも有意であった。こ

のことから言える最も重要なことは、これだけ多くの要因と相関関係があるという事実によってプロクセミックスの研究者の提唱する接触／非接触の文化の二分法の妥当性が高まったことである。世界の諸民族を単純に二分するということの正当性がこのことだけで完全に認められたとは言えないにしても、少なくとも人間の行動を「接触」、「非接触」と二極化して考える理論に利用できる点があるかも知れないということを示すことはできたと思う。

今回の調査では個人の研究者の印象に頼っていた多くの仮説がプロクセミックスの線に沿って検討され、あるものは実証され、あるものは反証された。変数の種類は多岐に渡る様々なものだが、そこには一定の傾向が見られる。先ず、一般的に言って人間の認識の仕方を考えない単なる物理的尺度のみに基く変数（例えばV06人口密度、V14一世帯あたり構成員数）はこの二分法にとっては重要でない。むしろイデオロジカルなまたコスモロジカルな要因（V16街路パターン、V20時間の扱い方、V23リーダーシップなど）にプロクセミック行動の本質を解く鍵がありそうである。また坐る姿勢（V22）、住宅問題（V15）、街路パターン（V16）、中央集権制（V17）などの様に概念的、実際的に空間と関連のある要素にはやはりプロクセミック行動との間につながりが見られた。民族構成（V08）、言語構成（V09）、移民（V11）の諸要因とプロクセミック行動要因との間に相関が無かったのは社会の同質性、多様性とこの種の行動パターンとの間が無関係であることを示しているが、この反証は他の実証された相関同様意義の深いものである。

以上見てきた様に本調査はいささかフォーカスの定まらない分析の不十分なものであることは否めない。が、少なくともこの調査がより精密でより焦点のはっきりした詳細な研究の可能性を示したという点で一つのステッピング・ストーンになるだろうとは考えられる。しかしその目的を達成するためには何よりも先ず、十分な目的意識とよくオーガナイズされた計画を持った調査者自身の手による観察、記述その他の方法が必要不可欠となる。さらにデータのより深い分析を可能にし、研究結果の信頼性を高めるためにはサンプル数の増加がやはり欠かせない。それらが実現して初めてプロクセミック行動及びテリトリアリティの実態と本質を解明する道が広がり、人間行動の理解が深まっていくのである。

引用文献及び参考文献

バードウィッスル、レイ・L
「Kinesics and Context」University of Pennsylvania Press
一九七〇年

ゴフマン、アーヴィン
「Interaction Ritual」Doubleday & Company 一九六七年

ホール、エドワード・T
『The Anthropology of Manners』八四―九〇頁「Science」 一九五五年
「The Silent Language」Doubleday & Company 一九五九年
『Proxemics』「Current Anthropology」vol.9 No.2-3 一九六八年
「Handbook for Proxemic Research」Society for the Anthropology of Visual Communication 一九七四年

「Beyond Culture」Doubleday & Company 一九七六年
「The Hidden Dimension」Doubleday & Company 一九六六年
ハンデルマン, D
『Expressive Interaction and Social Structure: Play and an Emergent Game Form in an Israeli Social Setting』「Organization of Behavior in Face-to Face Interaction」Mouton 一九七五年
ハーディガー, H
「Studies of the Psychology and Behavior of Captive Animals in Zoos and Circuses」Butterworth & Company 一九五五年
ヒューズ, ゴードン
『The Anthropology of Posture』「Scientific American」196 一九五七年
ローマックス, A
『Culture-Style Factors in Face-to-Face Interaction』「Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction」Mouton 一九七五年
メイヨ, クララ
「Gender and Nonverbal Behavior」Springer-Verlag 一九八一年
ソマー, ロバート
「Personal Space: The Behavioral Basis of Design」Prentice-Hall 一九六九年
「Tight Spaces: Hard Architecture and How to Humanize it」Prentice-Hall 一九七四年
ワトソン, O・マイケル
「Proxemic Behavior: a Cross-Cultural Study」Mouton 一九七〇年
『Proxemics』「Current Trends in Linguistics」vol. 12 Mouton 一九七四年
ワトソン, O・M・及びグレーヴス, T
『Quantitative Research in Proxemic Behavior』「American Anthropologist」68 九七一—一九八五頁 一九六六年

表－1　被調査社会　(i)

(各名称は HRAF 掲載に従った)

(01) ANAMESE
(02) CENTRAL CHINA
(03) GREECE
(04) GUJARATT
(05) HAITI
(06) HAUSA
(07) HIGHLAND SCOTS
(08) INDIA
(09) IRAN
(10) JAMAICA
(11) JORDAN
(12) KERALA
(13) KOREA
(14) LAPPS
(15) MANCHURIA
(16) NORTH CHINA
(17) OKAYAMA
(18) PUERTO RICO
(19) RURAL IRISH
(20) SAUDI ARABIA
(21) SYRIA
(22) TAIWAN HOKKIEN
(23) TURKEY
(24) UKRAINE
(25) VIETNAM

表－2　各変数の名称　(ii)

(VARIABLE LABELS)

V01 AREA
V02 CONTACT
V03 TOPO
V04 MOIST
V05 TEMP
V06 PDENS
V07 PRATE
V08 RACE
V09 LING
V10 WAR
V11 MOVE
V12 RIOT
V13 HHOLD
V14 DWELL
V15 HOUSE
V16 STREET
V17 CENTER
V18 DESCENT
V19 SUBACT
V20 CHRON
V21 TUNIT
V22 SIT
V23 LEAD
V24 COOP
V25 PSYCH
V26 RESID
V27 PRESEX

表－3　各変数の項目の名称 (iii)

(VALUE LABELS)

V01　表－1に同じ

V02　(1) CONTACT (2) NONCONTACT

V03　(1) MOUNTAINOUS (2) OPEN LAND/PLATEAU (3) VARIOUS

V04　(1) DRY SEASON PRESENT (2) HUMID ALL YEAR ROUND

V05　(1) SEVERE (2) MILD

V06　(1) HI (2) LO

V07　(1) HI (2) LO

V08　(1) HOMOGENEOUS (2) HETEROGENEOUS

V09　(1) HOMOGENEOUS (2) HETEROGENEOUS

V10　(1) COMMON (2) RARE

V11　(1) HI (2) LO

V12　(1) HI (2) LO

V13　(1) TWO GENERATION (2) EXTENDED

V14　no categorized values

V15　(1) ADEQUATE (2) INADEQUATE

V16　(1) GRID (2) RADIATING STAR (3) MIXED

V17　(1) HI (2) LO

V18　(1) UNILINEAL (2) BILATERAL

V19　(1) PASTORAL OR SIMPLER (2) MAINLY CULTIVATION

V20　(1) POLYCHRONIC (2) MONOCHRONIC

V21　(1) LONG (2) SHORT

V22　(1) SIT ON HEELS (2) CROSSED LEGS OR OTHERS

V23　(1) HI (2) LO

V24　(1) COOPERATIVE (2) NONCOOPERATIVE

V25　(1) EXTROVERT (2) INTROVERT

V25　(1) EXTROVERT (2) INTROVERT

V26　(1) UXORILOCAL (2) NONUXORILOCAL

V27　(1) PERMISSIVE (2) SEVERE

表—4　クロスタビュレーション及びカイ二乗検定

(1)

	V03		
V02	(1)	(2)	(3)
(1)	8	2	4
(2)	2	5	4

CHI SQUARE＝4.59184
(degrees of freedom 2)
SIGNIFICANCF＝0.1007

(2)

	V04	
V02	(1)	(2)
(1)	11	3
(2)	1	10

CHI SQUARE＝9.29305
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE＝0.0023

(3)

	V05	
V02	(1)	(2)
(1)	13	1
(2)	7	4

CHI SQUARE＝1.71469
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE＝0.1904

(4)

	V06	
V02	(1)	(2)
(1)	10	4
(2)	8	3

CHI SQUARE＝0
(degree of freedom 1)
SIGNIFTCANCF＝1.0000

(5)

	V07	
V02	(1)	(2)
(1)	11	3
(2)	5	6

CHI SQUARE＝1.67101
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE＝0.1961

(6)

	V08	
V02	(1)	(2)
(1)	5	7
(2)	3	8

CHI SQUARE＝0.08168
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE＝0.7750

(7)

	V09	
V02	(1)	(2)
(1)	12	1
(2)	9	2

CHI SQUARE＝0.02398
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE＝0.8769

(8)

	V10	
V02	(1)	(2)
(1)	6	8
(2)	8	3

CHI SQUARE＝1.18301
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE＝0.2767

(9)

	V11	
V02	(1)	(2)
(1)	5	8
(2)	5	6

CHI SQUARE = 0
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 1.0000

(10)

	V12	
V02	(1)	(2)
(1)	9	4
(2)	4	7

CHI SQUARE = 1.43772
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 0.2305

(11)

	V13	
V02	(1)	(2)
(1)	11	2
(2)	2	8

CHI SQUARE = 7.15348
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 0.0075

(12)

	V15	
V02	(1)	(2)
(1)	1	11
(2)	10	1

CHI SQUARE = 12.54842
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 0.0004

(13)

	V16		
V02	(1)	(2)	(3)
(1)	3	7	2
(2)	6	0	3

CHI SQUARE = 7.93333
(degree of freedom 2)
SIGNIFICANCE = 0.0189

(14)

	V17	
V02	(1)	(2)
(1)	8	4
(2)	1	9

CHI SQUARE = 5.09103
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 0.0241

(15)

	V18	
V02	(1)	(2)
(1)	7	5
(2)	10	0

CHI SQUARE = 3.28059
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 0.0701

(16)

	V19	
V02	(1)	(2)
(1)	8	6
(2)	2	9

CHI SQUARE = 2.44183
(degree of freedom 1)
SIGNIFICANCE = 0.1181

(17)

	V20		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 17.18225
(1)	11	0	(degree of freedom 1)
(2)	0	10	SIGNIFICANCE = 0.0000

(18)

	V21		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 13.66767
(1)	12	0	(degree of freedom 1)
(2)	1	8	SIGNIFICANCE = 0.0002

(19)

	V22		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 2.48580
(1)	4	7	(degree of freedom 1)
(2)	8	2	SIGNIFICANCE = 0.1149

(20)

	V23		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 3.82216
(1)	9	3	(degree of freedom 1)
(2)	2	7	SIGNIFICANCE = 0.0506

(21)

	V24		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 5.54572
(1)	2	10	(degree of freedom 1)
(2)	7	2	SIGNIFICANCE = 0.0185

(22)

	V25		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 1.16932
(1)	9	2	(degree of freedom 1)
(2)	5	5	SIGNIFICANCE = 0.2795

(23)

	V26		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 0.35916
(1)	2	10	(degree of freedom 1)
(2)	4	7	SIGNIFICANCE = 0.5490

(24)

	V27		
V02	(1)	(2)	CHI SQUARE = 4.15604
(1)	7	5	(degree of freedom 1)
(2)	1	10	SIGNIFICANCE = 0.0415

付録　V01からV27までの全データ

（変数を5個ずつ分けてある）

Anamese	012311	22211	1119901	12122	21991	12
Gentral China	022321	11221	1220581	12112	21212	22
Greece	031111	12212	1210382	21211	12121	22
Gujaraei	041311	11912	9110572	11121	92121	11
Haiti	051111	11112	2110522	11229	91211	21
Hausa	061211	11211	221 349	99229	12221	21
Highland Scots	072222	11212	2210361	12112	19221	21
India	081311	11222	2110602	21111	12121	22
Iran	091311	22111	1110462	22911	19111	22
Jamaica	101111	11112	2120572	21229	11222	21
Jordan	111311	11211	1110612	39111	19121	22
Kerala	121121	11911	2110599	31111	12999	11
Korea	132222	12211	2220531	12122	21111	22
Lapps	141121	22112	1110412	92111	12121	91
Manchuria	152121	21221	1229901	32129	91212	12
North China	162222	11211	2120561	32122	21212	22
Okayama	172321	12111	2220391	12122	21212	22
Puerto Rico	181121	11292	2110592	21221	19122	21
Rural Irish	192222	22112	2220431	99122	22999	22
Saudi Arabia	201211	21111	2210911	22111	11121	29
Syria	211111	21211	1999902	12911	12129	99
Taiwan Hokkien	222121	11111	2220572	31122	21121	12
Turkey	231112	11212	2220532	21121	11999	22
Ukraine	242221	12212	1199901	92922	92212	22
Vietnam	252321	12211	1129901	12122	21211	12

* V01は2つの桁，V14は3つの桁，その他はすべて1桁の数字である。
* 9は欠落項目（missing value）を表わす。（但しV14の欠落項目は99.0である。）